

海の植林技術開発

(予算区分 県単 研究期間 平成20年～22年度)
担当：伊豆分場

【研究の背景とねらい】

- ・ 榛南の磯焼け対策は坂井平田沖でのカジメ群落に回復の兆しがあり成功しつつありますが、御前崎沖では藻食性魚類の食害圧が高くうまくいっていません。
- ・ 今後榛南の磯焼け対策をより進めていくために、カジメ群落が回復しつつある坂井平田沖から御前崎沖へのカジメの移植が考えられますが、そのためにはカジメの再生産を阻害しているもう一つの要因である浮泥の対策が必要です。そこで、浮泥の多い榛南海域でも天然採苗によるカジメ移植を行うことができるブロックを開発します。
- ・ 一方、沼津内浦湾をはじめとして伊豆半島の西岸の一部では、ガラモ場が衰退していることが明らかとなっており、ガラモ場造成の必要性が高まっています。
- ・ ガラモ場衰退域では母藻がないため、ガラモ場造成のために中層網方式によるホンダワラ類母藻供給技術を開発します。

【期待される効果】

- ・ 浮泥対策ブロックで、カジメ群落が回復しつつある榛南海域坂井平田沖から御前崎沖へのカジメ着生ブロックの移設が将来的に行われるようになり、榛南の磯焼け対策がより推進されます。
- ・ 中層網方式によるホンダワラ類母藻供給技術の開発により、伊豆半島西岸～沼津海域のガラモ場衰退域の藻場造成だけでなく、御前崎海域での磯焼け対策に応用できます。



榛南海域でも浮泥の影響がなければこのようにカジメ幼体の発生密度(推定着生密度 200～300 個体/m²)は高い。



中層網方式の模式図

ガラモ場造成対象。2枚の網にホンダワラ母藻を挟み込み、海中に設置する。

【年次計画】

- ・ 浮泥対策カジメ用ブロックの開発
カジメ発生密度調査(平成20～21年度)水槽実験(平成20～22年度)
試作ブロックによる現場実験(平成20～22年度)
- ・ 中層網方式によるホンダワラ類母藻供給技術の開発
造成適正種の選択(平成20～21年度)中層網の選択(平成20年度)
耐久性と藻場造成効果の確認(平成21～22年度)

(作成 平成20年4月)